様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２７０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４６１６０１７

研究課題名（和文）多世代・多様な人々のインクルーシブな居場所づくりから次世代育成支援の可能性を探る

研究課題名（英文）Exploring the possibilities of fostering the development of the next generation through the creation of inclusive spaces that accommodate diversity

研究代表者
宇田川　久美子（UDAGAWA, Kumiko）

相模女子大学・学芸学部・准教授

研究者番号：９０５１３１７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,200,000円

研究成果の概要（和文）：多様性を前提とするコミュニティにおいて、メンバー間で個々人のもつ違いをその人らしさとして受け止め、関わり合うことで、自己肯定感や自らの存在意義を感じることが可能となり、社会的営みの中である役割を主体的に担おうとするようになることが明らかとなった。これは、障がいのある人も社会的マイノリティの人も全ての人が、個人としての尊厳を認められ主体的に参加できるインクルーシブ居場所であるといえる。これより、次世代育成支援の実現にはインクルーシブな居場所づくりが効果的であることが認められた。

研究成果の概要（英文）：It has become clear that in a community that assumes the importance of diversity, where its members interact by embracing every member's unique traits and differences as the very essence of their individuality, they not only realize the potential for an affirmation of self and the very meaning of existence, but also try to take an active role in their social activities. This can be an inclusive space in which the dignity of all participants, including social minorities and disabled people, can be realised. With this space, it has been recognized that creating inclusive spaces is the most effective way to nurture the development of the next generation.

研究分野：教育学

キーワード：インクルージョン　多世代・多様な人々の居場所　次世代育成支援　二人称的アプローチ

１．研究開始当初の背景

本研究開始当初の背景として、第一に、「分離からインテグレーション、さらにインクルージョンへの教育方法の転換」が挙げられる。従来の障がい児教育においては、障がいの程度や種類に応じて盲・聾・養護学校や特殊学級といった特別な場で指導を行う「分離教育」が行われてきた。そこへ、障がいのある者もない者も互いが区別されることなく、生活を共にすることが正常な社会であり、本来の望ましい姿であるというノーマライゼーションの理念が生まれ普及することに伴って、健常児のみの生活の場であった保育所や幼稚園で障がい児を受け入れる、インテグレーション（統合）が進んでいった。しかし、実際にインテグレーションが行われたのは場のみであり、障がい児は健常児を基準として障がいを低減、克服して健常児に同化することが求められ、障がい児の思いや個性が軽視されるという問題が生じることもあった（2005，鯨岡）。そして、障がいによって不当に排除されたり、不適切な扱いを受けたりすることなく、すべての子ども一人一人が、障がいの有無にかかわらず包含される社会のあり方として、インクルージョンの概念が提唱されるに至り（1994，サマランカ宣言）、政府全体で障がい者の社会への参加・参画に向けた総合的な施策が推進されている。教育現場においても、平成 19 年の特別支援教育の制度化に伴い、「分離教育」から「インクルーシブ教育」への転換が図られた。これより、障がいの有無にかかわらず、いかにして幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、適切な指導及び必要な支援を行うか、インクルージョンの実現に向けた取り組みが各教育機関では行われていた。

第二に、「関係発達論への発達観の転換による新たな発達支援の可能性」が挙げられる。これまでの幼児期の障がい児発達支援においては、人間の発達が個体内の能力の発達として捉えられてきたことにより、障がいは個人内のある能力の欠損した状態として扱われ、欠損した能力の改善により発達を促進していくことに主眼がおかれていた。そのため、障がい児の思いや個性を無視して教え込む「させる保育」が実施され、主体的な経験を通して発達していくという幼児期の特性が考慮されないという現状があった。そこで、幼児期の特性に配慮した障がい児の発達支援の可能性について、人間の発達を個体内のみに見出すのではなく、周囲の状況と他者との関係の中で捉えていく「関係発達論」の立場（鯨岡，1999；佐伯，2007）から分析、究明を行った。その結果、共生関係の構築による障がい児の発達支援の可能性が示された。具体的には、自閉症スペクトラム児には困難であると考えられていた他者の意図理解の発達に関して、実際の実践事例より、自閉症スペクトラム児が幼稚園のコミュニティのメンバーとのかかわりを通して、他者の意図理解の発達過程を歩むことを明らかにし、その理論的メカニズムを解明した（2008，宇田川）。他にも「関係発達論」の観点に立つ研究として、簡単なことから複雑なことへと系統的に教えていくスモール・ステップ学習では改善されなかった自閉症スペクトラム児の偏食が、幼稚園のお弁当場面や小学校の給食場面において、健常児との間でコミュニケーションが成立することで「皆で楽しく食べる」というコミュニティへの参加が可能となり、その参加を通して偏食が改善したというものもある（2001，渡部）。また、授業場面では席を立ち、教室内を歩き回る等、担任教諭にとって気になる存在である児童が、幼小の交流場面では保育者も驚嘆するほど幼児を絶妙にケアすることで新しい関係を構築し、その関係性の中で「思わずできてしまう」自分を実感して学びの志向性を高めていった。これより、ケアしケアされる関係の中で学び合うという新しい学びづくりを示唆し

たものもある（2007，林）。以上のことから、「関係発達論」へと発達観を転換することで、他者との関係の中での育ち合いを分析することが可能となり、共生関係の構築による発達支援の可能性について、具体的な提言が期待できることから、次世代育成支援の新たなあり方を明らかすることとなった。

２．研究の目的

インクルージョンという特別支援教育のあり方により、幼稚園教育の現場でも障がいの有無にかかわらず一人一人の幼児が一個の主体として受け止められ、共に生活を送っている。その中で健常児と障がい児が互いにかかわり合いながら自己の存在意義を見出し自立していく姿が認められ、ケアしケアされる関係によって育ち合う共生のあり方が示されている。一方、急速な少子化の進行等により「次世代育成支援」が現代社会の重要な課題となっている。そこで、本研究では、「障がいの有無を超えた共生」というインクルージョンの概念をさらに広げて「多世代・多様な人々の共生」とする。そして、「多世代・多様な人々のインクルーシブな居場所づくり」を通して、「子どもから高齢者までの育ち合い」が実現されるような次世代育成支援のあり方について究明する。

３．研究の方法

本研究の目的を達成するために、①札幌市内の異年齢保育を行っている「R幼稚園」における特別支援教育、及び②その幼稚園に隣接する非特定営利団体「ひろば N」（本団体は「乳児から高齢者までが育ち合える居場所づくり」を目指しており、平成 23 年度より札幌市地域子育て支援拠点事業「ひろば型」に指定されている。）の 2 箇所でフィールドワークを実施する。そして、フィールドワークにより収集したデータを箕浦（2009）によるフィールドワーク研究の手法で理論化する。すなわち、「多世代多様な人々のインクルーシブな居場所」における育ち合いの生起に関して、関係論的構造を解明する。また、インクルーシブ社会の生成への取組が進んでいるデンマークの福祉・教育現場を視察し、システムから実態までを明らかすることで、インクルージョン実現への理論的示唆を得る。

４．研究成果

本研究の主な成果として、以下の 3 点が挙げられる。(1) 多様な人々が集い、かかわることにより、一人ひとりの「違い」が排除されることなく、「その人らしさ」として受け止められ、一個人の尊厳が守られることを明らかにした。(2)「多世代・多様な人々の居場所づくり」というコンセプトをもつ「ひろば」が「インクルーシブな居場所」となっていること、さらに、その「インクルーシブな居場所」の生成過程を明らかにした。(3)「インクルーシブな居場所」の意義を示し、「インクルーシブな居場所づくり」が次世代育成支援に繋がることを明らかにした。

以下、研究の成果を具体的に記す。

「R 幼稚園」では、「人間の尊さを共に生きる」という教育理念のもと、子どもたち一人ひとりの発達の特性を踏まえて、遊びを中心とした保育を実践している。特色は異年齢保育を実施しており、かつ、積極的に発達障害児も受け入れているため、異年齢・多様な子どもたちが一緒に幼稚園生活を送っていることである。このような背景のもと、教育理念が生かされた保育者の子どもへのかかわりが子ども間のかかわりにも波及し、年齢や障がいの有無による区分なく、互いが互いを一個の主体として尊重して生活を送ることが可能となった。その結果、障がい児も年少児も世話を受けるべき弱者であることが集団生活の中で浮彫にされることはなく、一人ひとりのすべての子どもが主体的に幼稚園生活

に参加し、そこで生まれるかかわり合いの中で育ち合いが実現していることが明らかとなった。

異年齢・多様な子どもたちが一個の主体として尊重される中でかかわり合うことによって育ち合いが生まれるという現象が明らかとなったことで、多様な人々がかかわり合うことが次世代育成支援の実現につながると考えられた。そこで、異年齢・多様な子どもたちの場としての「R幼稚園」だけではなく、子どもという共通項を越えて、多世代・多様な人々が集まる「ひろばN」に着目をして研究を進めたところ、「インクルーシブな居場所」に次世代育成支援を実現する可能性があることが明らかとなった。それは、具体的には「ひろばN」における、知的障がいのある青年の活動に焦点をあて、分析したことによって得られた結果である。

① 「違い」を生かす

「ひろば N」は、隣接する R 幼稚園が子育てしやすい環境づくりを構想する中で 2007 年に「多世代・多様な人々の居場所づくり」というコンセプトをもって誕生し、その後 2011 年に地域子育て支援拠点「ひろば型」に指定された。このような経緯のもと「ひろば N」には子育て家庭の親子ばかりではなく、小学生、若者、お年寄りなど、多様な人々が参加者として、ボランティアとして、スタッフとして集う。知的障がいのある青年は、相談支援事業の支援によって 2010 年 4 月より「ひろば N」に参加者として通いはじめ、徐々にひろば内の役割を担うようになり、翌年にはボランティアとして、その二年後には有償ボランティアの位置づけとなるサブスタッフとして、多様な人々とのかかわりを通してひろばの活動に携わるようになった。青年を有償ボランティアとして受け入れるにあたり、スタッフ間では賛否両論があり、話し合いが行われた。青年には「できないこと」が多く、それを利用者にどのように理解してもらい、どのように責任をとるのかということが論点となった。多様な意見が出る中で、自分たちにも「できないこと」があり、それを支え合って支援を実施していることに気付き、青年は「できないことが多い」のではなく、「できること」の幅が異なるだけであるという新たな青年理解が生まれる。そして、「できないこと」を支え合うために青年のニーズをわかろうとして、青年話し合いに参加し、青年の意思を聴きながら青年の「ひろば N」での働き方を皆で考えた。このような経過のもと、青年が有償ボランティアとして受け入れられたことの意味は大きい。なぜなら、青年の「できないこと」を青年の能力を向上させて「できるようにする」ことで参加させるのではなく、周囲の物や人や事柄とのかかわりの中でできるようにするための方策を考えることで、青年が主体的に参加することを実現しているからである。これは、障がいによって生じる能力の「違い」により、青年が排除されることなく、その違いを逆に「その人らしさ」として受け止め、生かしているという意味をもつ。

② 文化的実践への参加

青年が「ひろば N」で活動する中で、子どもの思いを汲み取らず、目に見える行動だけを注意してしまうということが問題となる。そこで、スタッフ間で話し合い、「青年は子どもに注意をしないこと」というルールをつくる。それに対して青年は理由もわからないまま勝手に決められたと怒り、このルールは納得できないとスタッフに訴える。この青年の訴えを受けて、青年も含め、話し合いが行われた。まず、スタッフは青年がいないところでルールを決めたことは間違っていたと青年に謝る。さらに、子どもの行動にはその子どもの意図があること、その意図を汲み取った上で注意をする必要があることなどを説明し、青年がそれにどのように対応していくかが話し合われた。その結果、青年は、自

分には目には見えない子どもの意図を読み取ることは難しいと考え、納得した上で「青年は子どもには注意をしない」という同じルールができた。この過程は、スタッフの側からみると、スタッフが青年の思いや「困り感」など、青年のニーズを「わかる」過程であり、青年の側からみると、青年が「ひろば N」の実践や「ひろば N」にかかわる人々のニーズを「わかる」過程であるといえる。佐伯(1995)は、文化とは「つくる人」、「使う人」、「わかる人」の協同の営みであり、「わかる」ということも文化への参加のあり様であり、人は自分を取り巻く様々な文化的な意味をわかろうとするとき、それは文化的な実践への参加を意味することを示している。これより、青年の側、スタッフの側からの双方向の「わかる」過程が認められることから、「障がいのある・なし」、「支援する・される」という枠組みを越えて、「ひろば N」に集う全ての人々が文化的実践に参加しているといえる。また、文化的実践に参加することを通して、参加している全てのメンバーにとっての「よさ」が追究されていることから、メンバー一人ひとりが社会的営みにかかわっていると考えられる。

③ インクルーシブな居場所

「ひろばN」において、「違い」が「その人らしさ」として受け止められ、周囲の物、人、事柄とのかかわりにおいて生かされていることから、「ひろばN」に集う全ての人々の一個人としての尊厳は守られていることが明らかとなった。さらに、「障がいのある・なし」、「支援する・される」という枠組みを超えて、双方が文化的実践に参加することを通して、参加する全てのメンバーが自分たちにとってのよさを追究し、社会的な営みにかかわっていることも明らかとなった。以上の 2 点より、「障がいのあっても社会的マイノリティであっても同じ社会の中で個々の違いが尊重され、その人らしく共に生きることが正常な状態である」というインクルージョンの概念が認められることから、「ひろばN」は「インクルーシブな居場所」であるといえる。

以上のことから、インクルーシブな居場所において、多様な人々が集い、かかわることにより、「同じ」であることが多数派となって少数派が排除されるという事態が起こらず、多様性が認められることで、個々の違いが尊重されることが可能となった。そして、個々の違いが尊重されるというインクルーシブな居場所における「信頼」から、互いに互いのニーズを「訴え」、「聴き」、そして、全てのメンバーにとってのよさに向けて「応える」という関係が構築された。この関係はケアしケアされるというケアリングの 3 次元モデル（佐伯,2013）に相当する。これより、「インクルーシブな居場所」において、ケアリングが生起することが明らかとなり、ケアしケアされる関係のもと、インクルーシブな居場所に集う全ての人々の育ち合いが実現されるという次世代育成支援のあり方が示された。

【引用文献】

・林浩子（2007）「幼小の交流活動から見えてくるもの―幼小連携におけるもう一つの意味」日本保育学会誌『保育学研究』第 45 巻 2 号 pp. 87-94

・鯨岡峻・安来市公立保育所保育士会（編）（2005）『障碍児保育 30 年』ミネルヴァ書房

・佐伯胖（1995）『「学ぶ」ということの意味』岩波書店

・佐伯胖（2007）「人間の発達の軸としての共感」佐伯胖編著『共感―育ち合う保育のなかで』pp. 1-38 ミネルヴァ書房

・佐伯胖（2013）『子どもを「人間として見る」ということ』ミネルヴァ書房

・宇田川久美子（2008）「障碍児と共に生きる保育―自閉傾向のある子どもとのかかわりを通して―」博士論文（青山学院大学大学院）

・渡部信一（2001）『障害児は「現場」で学ぶ』新曜社

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

①宇田川久美子．「保育の場における自閉症スペクトラム傾向のある子どもの心の育ち：「二人称的アプローチ」により情感を共有する」「発達 144」pp. 45-50 ミネルヴァ書房

〔学会発表〕（計 7 件）

①宇田川久美子．知的障がいのある青年の文化的実践への参加：インクルーシブな居場所の意義．日本発達心理学会第 27 回大会．2016 年 5 月 1 日．北海道大学(北海道札幌市)

②林浩子・宇田川久美子・岩田恵子・佐伯胖．子どもがケアする世界をケアする：二人称的／三人称的かかわり．日本保育学会第 68 回大会．2015 年 5 月 10 日．椙山女学園大学（愛知県名古屋市）．

③Iwata, K., Udagawa, K.,& Hayashi, H. Caring and dialogue between children and the world: The developmental processes of play. The 4th Congress of the International Society for Cultural and Activity Research, 2014年9月30日. Sydney Australia

④林浩子・宇田川久美子・岩田恵子・佐伯胖．子どもがケアする世界をケアする①：遊びと人的／モノ的かかわり．日本保育学会第 67 回大会．2014 年 5 月 18 日．大阪総合保育大学（大阪府大阪市）．

⑤宇田川久美子・林浩子・岩田恵子・佐伯胖．子どもがケアする世界をケアする②：自閉傾向のある子どもと人的／モノ的かかわり．日本保育学会第 67 回大会．2014 年 5 月 18 日．大阪総合保育大学（大阪府大阪市）．

⑥林浩子・宇田川久美子・岩田恵子．子どものケアする世界をケアする．日本保育学会第 66 回大会．2013 年 5 月 12 日．中村学園大学（福岡県福岡市）．

⑦宇田川久美子．幼稚園を活用した子育て支援の可能性：多世代・多様な人々の居場所づくりを通して．日本保育学会第 65 回大会．2013 年 5 月 5 日．東京家政大学（東京都板橋区）

６．研究組織

(1)研究代表者

宇田川　久美子（UDAGAWA KUMIKO）
相模女子大学・学芸学部・准教授
研究者番号：９０５１３１７７